

# 篠原助市教授の生涯と業績

下 程 勇 吉

## 1 “負い目”の道



篠原教授は明治9年（1876）6月6日愛媛県周桑郡中川村字米見に越智家の長男として生れ、3才にして同県同郡田野村字田野上方の篠原家に養われ、篠原姓を名乗り、農家の子として出発し、明治26年10月愛媛県尋常師範学校に入学以来、終始学芸と教育の道に一筋に専心し、昭和32年（1955）8月2日に神奈川県湯ヶ原町吉浜の地に逝去せられた。昭和27年、75才の博士は、次のごとく詠まれている。

老らくのわれまだ老いずたどり来し

道一すじをい行き行かなむ

『道一筋をい行き行かなむ私の頑固さ、脊骨の硬さ』と博士自ら語ってられるが、これこそ博士の生涯を貫く真面目というべきであろう。この「道一筋を行く」ねばり強さはどこから出て来たのであろうか。その要因の一つとして、17才までの農耕生活がかかる博士の性格形成に及ぼした影響をあげることができよう。『田畑の耕作に専念し、星をいただいて出で、月影を踏んで帰り、牛や鋤や鍬との生活に、労苦の、いや労苦ではなくて、勤労の喜びを知った云々』と博士は少年時代の思い出を語られるが、博士の作業教育論にはかかる農耕の体験の裏付けがあるのである。日本の大地に一畝づつうち込んで行く根気強い農民的性格が後年の質実無比の博士の教育学者的性格に流れこんでいることは、争えぬであろう。まことに生活が人をつくるのである。74才の博士は、18年目に花を開いた庭の木犀を前にして、『何事も耐久である』とその人生哲学を語っているのであるが、日本の大地に根気よく取組む農民的性格は、博士の性格の早期形成に重大な一要因として参加しているといえるであろう。

しかしただ根気のない農民的性格のみからすぐれた教育学者は生れない。そこには、ただ『網の目に頭をつっこんだ魚のような自然の生活を何年か息のつづく限り営まねばならない』運命があるばかりであろう。しかれば、如何にしてこの“貧農の子”は自分の頭をつっこんだ“運命”の網の目から身をふりほどいたのであろうか。ここには、運命の網の目から我が身をひきはなす“夢”があったのである。その生涯の回顧録「教育生活五十年」を執筆しようとする動機を語って、博士は次のごとく書きのこしている、『顧りみれば、私の一生はあまりに夢の多い一生であ

った。貧農の養子として育ちながら、教育者たろうとの夢を抱いた。小学校教員になると、もっとよい地位をとの夢。夢、夢、夢。運命の桎梏から脱け出そうとの夢に荆棘の道をまっしぐらに進んだのが私の辿り来た道ではなかったか。』

博士は自分の生涯を『運命と夢との二筋道』といているが、“あくまで運命（自然）に従いながら、これを超出する”夢を抱き“自由”を求めてやまぬところに、博士の人生への出発があったのである。『運命を左足とし、自由を右足として、ヨタヨタ歩みはじめた経路を一通り辿ってみることにする』とその回顧録が書き起される所以であろう。

ところで、この青年が頭を高くし眼を輝かして人生の道を歩みはじめたのではなく、それこそ“ヨタヨタと歩みはじめた”といわれるの何故であるか。運命はこの青年の“夢”を動機付けるのに、むしろ大きなおもしろい、“肉体のとげ”をもってしたのである。すなわち、この少年は“手足が不器用なので、鋏一つの簡単な仕事も同年輩の人の真似すらできない。とても、一人前の農夫になれないと気づいたのは、10才頃からであった。”かく“運動神経は鈍くて”も、“記憶力には恵まれていた”この少年は、隣郡の優秀生に伍して最優秀の成績を得たのであった。ここに不器用な貧農の子には“何とかしてもっと勉強したいとの願いがもり上って”来たのであるが、高等小学校に通う資力もなく、この切実な“願い”と“夢”を抱いた青年はここに“大きな壁にぶつかった”のである。“壁にぶつかったままあとすぎりするか、または小さい抜け穴を見つけるか、二つに一つという場面に立って、偶然にも穴が見つかった。”すなわち私塾養正館への通学である。“この時、この心のはずみ、この生活の一大転機をどうして忘れ得よう。この覚悟をどうしてぼかし得よう。右か左かの私の一生の道がほぼここにきまったのである。”80の年をむかえた老碩学は“12才の冬”のことを今日のこのように語るののである。この一筋の好學心こそすべての原動力であったのである。しかも、在塾3年に充たずして退学し、農耕生活にかえり、勤勞の喜びを味わったものの、再度の農耕生活後3年にして、“耕せば耕すほど、農業に適しないこと”を自覚し、いよいよ師範学校入学を“夢”をかきたてたのであった。第一回は体格検査ではねられたが、次の補欠入学試験には首尾よく合格したのであった。時に17才。自然のままならば、農民の生活に終始するのほかなき運命であった少年は、百方工夫をつくし理性によってその自然・運命をこえて、学芸・教育に生きる自由への道を開いたのである。後年、教育を“自然の理性化”“個性の歴史化”としてつかんだ博士の教育学的立場は実にここにその原始的基礎体験をもっているといわれよう。その生涯を記録した「教育生活五十年」の序文が『壁にぶつかりつつ、小さな出口をうがとうともがき通し、“偶然即ち自由”の信念のもとに書き上げた云々』と結ばれていることは、きわめて意味深いといわれよう。篠原博士の生涯こそは、いわゆる“壁”にぶつかっては運命的制限を自由に化する歴史そのものである。ここに自然が理性化せられ、運命が自由化せられ、個性が歴史化せられる原始体験が篠原教育学の基盤となったのである。

かかる制約より自由、偶然より必然、自然より理性への飛躍を可能ならしめたものは、既述のごとく、この青年の運命ともいべき身体的制限としての“肉体のとげ”である。農耕に従うべき運命に生れながら、農耕に適せぬ“不器用”“鈍い運動神経”等々といわれるような身体的制約そのものが、記憶力と理解力に長ずるこの青年をして一筋に教育・学芸の道に向わせる飛躍板となるのである。運動神経の鈍さと知性の鋭さとは、師範在学時代の成績にはっきり反映している。すなわち、歴史・数学・理科・国漢・英語は優秀であるが、音楽・習字・図画・体操などは60点をあまりこえぬのである。行軍のときに、『並はずれの音痴』であることを思い知らされて、『そのときインフェリオリティ・コンプレックスにグットつき刺った、何で何時拭い去られよう』とまで心痛むものがあっただけに、音楽の時間には『屠所への小羊のようにうな垂れて教室に入った』のであった。音痴は英独の会話の場合にもあらわれ、発音・習字の拙さは『これも運動中枢の人並にはたらない結果にほかならぬ』と自覚されて来る。音楽ばかりでなく、『美術の鑑賞眼はゼロ』である。水泳も『金槌』である。運動神経の鈍さは、さきに百姓仕事を断念せしめたが、今や『差し引きならぬ劣等感』に導びくのである。鉄棒も球投げもランニングもまるで駄目である。『あるいは脳の運動中枢が全く麻痺しているのではなからうかとさえ疑われ、運動場の楽しかるべき一ときが楽しいどころか、却って劣等感を沈澱せしめているのである。』“ダンプクロ”と綽名をつけられたこの田舎者の学生には、劣等感が『下意識にからみつ』『長く長く、今も私にからみついているのである』と80才になっても述懐せられるのであるが、劣等感にさいなまれるこの青年は今や自分を孤独において見出すのである。劣等感・孤独・内省・抵抗意識・負けずぎらい、この一連の構造的連関がやがて後年の大教育学者への道を開くのである。『幼稚園の……芝生や、藤棚の支柱によりかかって冥想にふけるのが、いつのまにか習慣になった。語る友もなくて、孤独であった。その代り、下手な運動を笑われることもなく、悠々自適、自然の移り変りに身を任せ、益々内向的になった。そして、この自適さはかえって自由の意識として、劣等感の“補償”として私を更に内面的な方向に前進せしめた。……私は孤独であった。孤独が青年時代に時たま起る現象で、レジスタンスへの温床であることは、ずっと後に知ったのであるが、思えば私の並はずれた抵抗意識、“負けるものか”とのやせ我慢は早くすでに幼稚園の芝生に、例えばうるわしい芝生を荒らすかやのようにあちこちに芽を出したのである。そして少年時代消極的であった劣等感は、今や積極的な抵抗意識へと転じ、少年時代ぶつかった壁に、今や風穴が穿たれたのである。』劣等感は孤独の中に沈澱をつくりつつ、やがて抵抗意識として積極化する。しかも当時の師範学校教育は、軍隊的訓練中心の“魂のない形式教育”に墮し、『もったいぶった風貌、規則づくめな振舞、時には盲従・偽善に墮ち、青年時代の若々しい自由を喪失せしめ』、いわゆる“師範かたぎ”をつくり出したものである。かかる教育と“青年客気”の“抵抗意識”と衝突するところ、炊事当番交代の際の酒食事件となり、遂に一箇年退学処分となったのであった。この師範学校4年生の時の一事件こそは、孤独な青年の内省的内向的傾向をいよいよ助長し、ここに一つの大きな転機をもたらしたのであった。『停学一年、客観的に

## 篠原 助市 教授の生涯と業績：下程

は短い年月であるが、主観的には近隣の評判をはばかり、狭い部屋で、蝸牛のように殻にとじこもり、さてこれからどうしようかと考え暮すことは、大きい苦悩であった。しかし、その結果、私の人生観はコペルニクス的に転回した。生来、数学、理化学など理科的である私は、国語、漢文、英語などの文科的方面へくると転回したのである。停学にならず理科的方面をまっしぐらに進んだとしたら、私は今頃どうなっているであろう。もとより一切想像の外にある。何れにせよ、自分で蒔いた種子は、自分で育て、自分でとり入れねばならぬ。』今やここに孤独にして強い抵抗意識に生きるこの青年に自分の荷を自分で負うて立つ実存的主体性がめざめて来たのである。かく袋小路に追いつめられるところ、自分の性格と運命に徹しぬからとする一筋の白道が開かれたのである。『所詮介殻の中にとじこもった蝸牛のように、狭い隅っこにうずまることに落ちつかざるを得ない。それも宿運か、業か。いやいや、宿運でも、業でもない。自分で招いた、己に克ち得なかった自分のいたずらの報である。くよくよするよりも、これを踏台として、これからの一年を新しい世界への黎明期としよう、と覚悟した。しかし、気の弱い私は、実家に学資の弁償を切り出し得ず、養家の父母にも暗い陰を歩ませ、“新しい世界”への覚悟も幾度か挫けた。しかし挫けたものを挫けたままに打ちやらないで、介殻の中に息ぬきをつくり、頭にぶつかる壁をコツコツ砕くだけの力はまだ存しているらしかった。たとえば介殻を負う蝸牛に“化してなめくじとなり自由を得んと欲す”との自由のあるように。から元気と笑わば、笑いたまえ。私という男は、本来そんな生れあわせではないであろうか。弱くて、弱きに尽きないところに、私の将来へのある一縷の望みがかかっているのではなからうか。抵抗意識の過剰こそは、私の業であり、宿運であったのであろう。』壁にぶつかる毎に、力強くわき出る抵抗意識こそは、やがて後年篠原教育学の性格として『注意的な立場がいつも私の考えの背景になっている』と博士自身に語らしめる所以のものなのである。かかる抵抗意識は、時として『例えば明治44年の稲垣末松教授との論戦に見るとき闘志として燃え上り、翌年の山川京大総長の送別式に総代となることを峻拒した場合に見るとき『頑固無比』な態度ともなるのであるが、篠原博士の抵抗意識は全体としては、攻撃的外向的であるよりも、防禦的内向的である。かかる自己籠城的抵抗意識を博士自身は『介殻生活』と名付けている。師範学校時代に停学処分をうけた際の起居について、次のように書かれている。『私の冥想癖は、日とともに加わった。意地っぱりな根性はぬけないのみか、かえって根を張った。六畳の部屋で雨戸を半ばしめ、——私には部屋のあけっぱなしを嫌う習性があり、今でも昼間戸をしめ、電灯の下で読んだり、書いたりするので、よく笑われる。介殻生活の余波であろうか——ポカンと坐っている時間も少なくなった。坐っていたとて、坐禅などは何のゆかりもなく、ただ坐ってさえすれば、心足るのであった。』こうした“介殻生活”は篠原博士の生活の一面として注目し価値する。例えば、奈良女高師の講師時代にも、教官の会食に加わらないで、一人で食事をするのである。また外遊の際、太平洋航路においても、乗客と共に遊戯したりすることもなく、読書と景色をたのしむ『孤独と閑寂』の生活に満足し、『一人ぼっちの世界こそ、私の世界なのである』と書かれるのであるが 再度の外遊のときも、トラン

ブをならう気もなく、『一人の船室に、一人で自由な姿勢で、雑誌を読むのがかえってくつろぎを感じる』と書かれている。もとよりこうした態度は精神分裂症的に一切の交わりを断つのではなく、いたるところで親しい人びととの交わりを容れているのであるが、かく“自己自身の時間”をもって一筋に学の道に行く生活態度こそ博士の生涯を貫いている。第2次大戦中『敗戦と早く見切りをつけた私は悠々閑々たりであった』という態度で終始した博士は、終戦後の混乱期においても、次のごとき言葉が終戦後の第一作「民主主義と教育の精神」の扉に自筆で認められている、『狂瀾の世に処するには、目も耳もふさいで、通り来った狭い道を一筋に行くほかはないとの決意を懐いてからの第一の試論。』こうした一筋の道に行くことなしに、あれだけの学的業績は到底成就しなかったであろう。論壇などの花形役者として華々しく活動するよりも、孤高よく学に生きぬかれたところに、篠原教授の真面目を見るべきである。時世とともに説と節を交じるあまりに政治家的な教育学者も少くないときに、質量ともに群をぬく篠原博士の業績とその純粹無雑な学究的風格を思うものは、また博士が孤独にたえぬかれたその“負い目”に思いを致すべきであろう。そこには、深い孤独にともなう不安と動揺とが“聖なる創造”のつきぎる根源をなしているのである。この点からいって、博士の次の言葉は注目に値するであろう、『不安と動揺は、神経質な私の、生れながらの負い目である。負い目は負い目として、どこまでも背負い切れねばならぬであろう。』まさに劣等感・孤独・不安・動揺の負い目を背負いつくし、己の弱点を己のものとしてつかみとるところに、否定そのものに媒介された実存的精神的主体性が尽さざる創造的源動力として生きてくるのである。

かかる生活態度は、己の内なる明暗・長短・善悪についてのみでなく、いわば外なる運命のもたらす負い目についても同様にとられるのである。すなわち自己をどうにもならぬところに、投げ出す運命にたえぬいて、そこに道を開くところに、リアリストとしての博士の面目があるのである。この点をことに明確に物語るものは、大正10年9月急逝した先夫人の位牌を前にしての感慨であろう、『思えば私や子供の力では何ともできない現実であり、われわれを超越しきった神に投げこまれた運命である。神を自分の心胸に引きさげ、自分の心胸を神に高めることは、ヘーゲル流のアイディアリスト（理想主義者）ならばとにかく、リアリスト（現実主義者）は投げこまれた運命に忍従せねばならぬ。個は個として絶望の淵にまともなぶつからねばならぬ。頭を絶望の限界にぶっつけて（あるいは、ぶっつけられて——自分の意志ではないから）額から血の湧き出るのをじっと辛抱しよう。』『我慢強く”やせ細った身体に5人の子を育て”遂に心身ともに碎け去った亡妻の靈に帰朝者は重ねて次のごとくよびかけるのである、『妻よ、お前も死の深淵に投げ出されたのである。……超越者の御意によつて投げ出されるのであるとしたら、お前も、誰も恨みようはないであろう。……もとより個々人の意志で何ともしようはない。我慢強いだけで凌ぎ切れるものでない。お互いにこの20年近くそうであったように、これからも底なき底に靈のいぶきを吹きかけ合い、あたため合おう。……だが僕はまだ生きねばならぬ。自分の修業のために、5人の子供の成長のために、——一切を靈の、靈の靈なるもの（神）の黙示に任せて。投げ出

されようと、食って行かねばならぬ。蒲団をかぶっても、歌心のある人は歌わねばならないであろう。食うことと、霊の美的な具象化とは、われわれ人間の道徳的な“負い目”である。この負い目を償うことこそ、人の人としての責務である。さらば、再び言う、一切を霊の黙示に任せて。』

一応も二応も自分の力ではどうにもならぬ自己の内外の壁に頭をぶっつけたときに、その重圧にたえかねて、自己をおしつぶしそうな運命的な“負い目”から逃避しようとするところに、人間精神の致命的な弱さがあるのであるが、かかる自己内外の運命的負い目によく耐えぬき、それと対決するものこそ、“一步は一步より動揺の上に静坐する”（藤村）精神の秘義に参入するものである。「不安と動揺」を「生れながらの負い目」として「負い切った」ところに、篠原博士自身が80年の生涯において身をもって証示した最も深い人間形成の教育学的真理がある。このことを抜きにして、博士の性格と業績の本質は把握せられないであろう。昭和11年7月の日記に『余は何事も運命に服従すべく、服従しつつ前途を切り拓くべきである』とある所以である。負い目を負い目として背負いつくすところに、自然から与えられた弱点・劣等感がかえって高次の理性的歴史的創造への「踏み台」となり飛躍板となるのである。ここに篠原教育学の根本をなす「自然の理性化」「個性の歴史化」という原理が博士自身の基礎体験において把握せられ証示されている所以があるのである。今日とかく極度に *frustration* を忌み劣等感を無くすることのみにつとめる消極的教育が重大視せられる傾きがあるが、*frustration* にたえぬき、むしろ劣等感に正面から取りくむ積極的教育が根源的に必要なのではあるまいか。このことを証示して余りあるものが、篠原博士の生涯と業績であるといわれよう。

自然の理性化という立場に立つ篠原教育学は、全体としては、理想主義的であるが、“負い目を負い目として背負い切る”ところに、その教育学の基礎体験が成り立つ点からいえば、篠原教育学は最も深い意味において *realism* の立場に立っている。このことは博士の自伝「教育生活五十年」に赤裸々な懺悔的性格を与えている。博士はあるがままの自己に対決し、自己の弱点・失策を極めて客観的に表現している。自己の弱点・失策までもさながらに表現する自己客観化は、あるがままの事実を徹抜く主意主義的な強さと自己中心性をこえる超越的心境がなくてはならない。この点に博士の真面目の一面を見るべきであろう。博士は自伝「教育生活五十年」において自己の弱点・失策を端的に卒直に語っている。そこには“哲学的な”もってまわった理由付けなど殆んどないのである。師範在学時代の英語の会話について、『やっと言ったことも、不自然で、直接連合でないから、表現はいつもつぎはぎ、……もがけば、もがくほどますます不自然となる云々』とあるが、渡米の時の英語については、『私の英会話は（中間に通訳役が必要であるほどに）それほどあわれなものである』と書かれている。昭和9年に文部省教育調査部長就任の際、敏送迎会のテーブル・スピーチにおいて、フンボルトを引き合いに出して話を結んだのであるが、そのときのことが次のように書かれている、『……と卓を叩いて“呼号”といっても、言いすぎでないほどに、興奮したのである。日田君や森岡先生のおだやかさに比べて、何という

ぶざまか。語り終って着席したとき、腋下に冷汗が流れ、いつも酔っぱらったような赭顔に青い血管が脈搏っていたに違いない。一同から拍手せられたが、即座に私はこの拍手の何を意味するかを直感した。直感したものの、馴も舌に及ばずで、前言は取り消し得べくもなく、その後幾度となく、後悔の種になったのである。』人はこうした叙述にルソーの「告白」を想起せずにはいられぬであろうが、またこれに類することとして、昭和12年頃「教授」と「訓練」の区別をめぐる論議において“教育学者の面にかけて云々”と“大見得を切った”とき、次のように書かれている、『……稚気満々と、人々は恐らく失笑されたであろうが、この頑固さこそ私のバックボーンとして昔ながらのもので、今更改めようもない。』ここで人は『私の長所といえば、堅苦しい真実をせきこんで他人に語ることであった』と述懐した直情径行のルソーの田舎漢的性格を想起するであろう。田舎漢的性格は時として無暗に豪放洒脱振りを気取る大家気取りともなるのであるが、ルソーの場合はその本質において真実性に貫かれている。篠原博士の場合は、本質的にルソー的である。そこには、深い懺悔的性格が自ずとに滲み出ている。それは自己の制限・弱点そのものに対決するところから生れる謙虚さに深く裏付けられている。その故に、外面的な偽善や豪傑振りをもってごまかすなどといった軽薄な態度は更に見られないのである。このことは教授退職のときの後任問題の叙述にも見られる。ここでは『これは私にとって一生消し得ない大失策であった』とまで書かれている。

## 2 愛 の 道

孤独で劣等感にさいなまれ、「不安と動揺」を「負い目」として背負い、「一人ぼっちの世界」に住していても、それは何も精神分裂症的自己籠城性ではなく、その内攻的性格には誠実なる人間性が赤裸々に生きているのである。ここに、余りにも場当りのみをねらう政治家的な教育学者などと根本的に異なる篤実な篠原教授の真面目があり、またたえずよき友人・知友が——教は必ずしも多くなくても——教授につながりをもって来る所以があるのである。このことはどの時期についてもいえるのである。真の内面的創造の条件は、孤独にたえる性格に少数のよき友がめぐまれることである。この点で篠原博士は十分恵まれていたといつてよいであろう。博士の純真な孤独的性格はその底に広く深い人間愛の場を開いている。このことは松山時代・福井時代等からはじめて終生いわれることである。実父母・養父母に対する孝養心の篤きはもとより、渡米中夫人の病重しの報に接しすぐ帰国した愛情、ロンドンで夫人死去の報に接したとき“嗚咽せざるを得なかった”その愛情等々、家族に対する愛の深さはもとよりであるが、その知友との深い交わりの一例として、昭和26年の福井訪問の記述の一節をあげることができるであろう、『福井の会合は、四十有余年の教育生活中もっとも愉快な一コマであった。七年有半の福井生活は短かくはない。しかし、不敏をも許されて、(旅行先の)金沢から招致せられたこと、旧い訓導や子弟、附属小学校の旧児童までが、五月雨の泥濘をも物ともせず、集まって下さったこと、千紫万紅、それぞれ立派な花を咲かせていられること、教育者としての、これに勝る報いが何処に、いや、

教育者ならでは、何処に存するであろうか。』更に多くの旧知人の死去に人生朝露の感を深くしつつ、博士は次のごとくのべられている、『一喜一憂、これ春秋、人として、人たる以上、運命の縁からすっぽり脱出することは不可能である。この会合を……会衆の方々に感謝するとともに、運命のまつわりを甘受しつつ、生きのびるだけ、生きのび、はたらけるだけは、はたらこう、“一苦一楽相磨練し、練極って福をなすとき、その福はじめて久し”といわれているからには、死もまた永遠の福たらしめねばならぬ云々。』まことに運命の愛と裏合わせになった人間への愛は、篠原教育学の窮極原理である。

すでに46才の頃、在米日記の一節には、次の如く書きとめられている、『一々の善行そのものには、大した意味はない。それが人と我との境をこえ、人間愛にまでたかまったとき、はじめて価値がある。人間愛とこれによる人類への奉仕は教育の目的ではないか。』かく書いて、『爾来星霜三十有余年、私は“人間愛による人類への奉仕”を胸に刻んでいたか。ゆるみ勝ちな心の手綱が利己心に向ったとき、真正面を見つめて、さゆるぎもしないだけの慎重さがあつたか。どうかして、赤恥をさらさずに、綱渡りをなし得たのは、神の恵みと感謝にたえない。』“人間愛による人類への奉仕”の教育哲学はその根本性格において二宮尊徳の哲学にほとんど符を合するときもものがある。かかる教育哲学に到達した達した直後、夫人の病篤しの報に急いで帰国の船中で成った一詠に、

妻子思う心に人を愛で行かん

大海原の果てなきがごと

とあるが、妻子への愛はその利己主義的自己中心性をこえて、超越的に人類愛に高められ、いわゆる“生活よりの純粹”を達成するとともに、また人類への奉仕にまで具体化せられて、現実の社会への集中的活動となり、“生活への純粹”を実現し来らねばならぬのである。この点では、篠原教育学と二宮尊徳の教育哲学は深く冥合するものをもっている。上にあげた歌を次の尊徳の道歌と対比するとき、人は何を思うであろうか。

おのが子を恵む心を法とせば

学ばずとても道にいたらん

ことに尊徳の立場と篠原教育学の冥合を思わせるものは最後の体系的力作「訓練原論」である。ここで善悪判定の根拠として「人により、人の為に」という命題がかかげられ、ここから、人間の基本的人格、正義、愛、奉仕というような人倫社会の基本的徳目が導き出されるのであるが、先ず人がよく自立し得るのは、「人々よりて」である。しかもかく「人々よりて」自ら立ち得ると知るとき、人はそれに「感謝を捧げるとともに」、それに対して「報恩」の実をあげるために、「人の為に」つくす一念から「自らの本分を遂行し」なくてはならない。『自は他によって自であるとともに、他のための自である。』『“人により”とは拱手、人にたよることで、他を自らの方便とすることでもなく、まことは他に感謝し、他を人として立て敬うの情からしての“人により”であり、“人の為に”するには先ず以って自ら人として立ち、自ら自らを敬重しなけれ



ばならない。』ここに『人により、人の為』の社会は、自他が相互に尊重し、相おかすことなくして、深くつながる正義と愛と奉仕の人倫的統一である。ここに『個々特殊の人格として自己の本分を充実し、相互に対し合おうとの意志』が道徳的意志として説かれるのである。篠原教育学の道徳教育の倫理哲学的原理は『人により、人の為』であり、その主徳は『まこと』であり、それは『社会的位置に応じた個別的な本分の充実による奉仕』として具体化せられるのである。かく説かれるところよりすれば、自ら立つは人びとの力によるところと深く自覚し、その徳に報いるに“人為”の行をもってするところに、天地人を貫く人間究極の道を見とどける二宮尊徳の立場と篠原教育学との冥合を指摘することはある程度の根拠をもつといわれるであろう。（拙著「二宮尊徳の教育哲学」参照）

いづれにせよ、青色青光赤色赤光、各自をしてその本分を充実し実現せしめるために、人の為に奉仕し、また逆に人のために奉仕するために、青色青光、赤色赤光その本分を充実し実現するところに、人間窮極の道があるといわれるであろうが、窮極的にはかかる立場に帰入した篠原博士がすでに太平洋戦争以前にいわゆる皇国民錬成教育に反撥を覚え、昭和15年9月、文部省調査部長の職を退いたのも当然であろう。また終戦後に、『同胞愛からして、すべてがすべてに、結局世界の人道に奉仕すること』が民主的教育の根本精神として説かれたのも、当然な論理の展開といわれよう。かかる教育哲学に立つ篠原博士が“天地の大道と親心”を“敬愛信の三相一元”につきとめる恩師小西重直先生の立場に深く共鳴しつつ、『道徳がまことの道徳たるために、隣人愛の宗教的精神にまで昇華しつくされねばならぬ』とその道徳教育の窮極原理を説くのは、また必然の帰結といわれるであろう。

### 3 京 都 大 学 入 学 まで

3才にして篠原家に養われた博士は、終始養父母に親しく孝養の実をつくすこと、実父母に対すると更にかわることがなかった。小学校の成績はきわめて優秀であったし、農業に適せぬ身体的条件もあって、つとに師範学校を志すに至ったが、それもすぐとは実現できず、近隣の私塾養正館に学ぶこと、2年余、やがて再び農耕生活に入り約3年間田畑ではたらき、いよいよ師範入学の決意を固めたが、最初の入学試験では身長5尺、体重10貫という基準にみたぬ身体的条件で不合格となり、次の補欠試験において60余人中の6人の合格者の圏内に入り、愛媛県尋常師範学校に補欠仮入学を許された。やせて背の低い新入生は、“ダンプクロ”という綽名をつけられて田舎者扱いせられ、その上運動神経の鈍さ・音痴のために、劣等感にさいなまれ、青春時の孤独をなめ尽したことは、既述のごとくであるが、こうした“壁につきあたって”の実存的修練こそは、篠原青年を大成せしめる原動力となったのである。福沢諭吉の「学問のすすめ」やことに中村正直訳の「西国立志編」などの影響をうけたが、3学年のとき、ヘルバルト派のリンドネルの教育学やジョ・ホフットの功利主義的教育学を学び、4年生のとき、学校管理法を担当した砂崎徳三から『日々修養しないものは、教師たる資格がない』との“無言の戒しめ”を与えられたこと

の意味は重大である。4年のときの停学によって、理科方面から文科方面に向うようになったことも、既述のごとくである。教育実習では附属小学校の露国訓導のヘルバルト的5段階教授法に対する実践的批判に大きな感銘をうけている。ここに早くも、単なる書物学問としての教育学に止まり得ぬ篠原博士の生きた教育的感覚がめざめていることが知られよう。“訓練論”(40字詰20枚)の卒業論文を出して卒業後、22才にして3ないし4学級の小学校の校長となり、すぐと6週間現役兵として服役したが、ここでも運動神経の鈍さに悩まねばならなかった。退営後、谷本富博士の「自学補導」の教育説や大西祝の「倫理学」の影響をうけつつ、小学教育に従事しているうちに、親友小森経夫のすすめもあって、東京高等師範学校を志すにいたったが、「怠け癖と酒癖」のために、準備不十分で不合格となったが、つづく1年間の教育活動は“愉快”なものであった。このことは、次の述懐にも明らかである、『少年の教育が如何に楽しいかをしみじみ味った、この1ケ年は、私の長い教育生活中、比較的波瀾の少なかった時期であったともいえよう。』しかしここでも、音楽の授は悩みの種であった。

次の年は、25才で宿望の高師入学を許可された。高師時代に、発音の不得手という短所に対処するところから、実用英語を断念し、思想吸収の語学の立場をとることをきめ、その点について一文を草し、仏語独語の学習をはじめたが、このことは後年の学生生活に入るための先駆的段階として注目される。高師在学中に、感銘をうけた教授には、孔子研究で名のあった蟹江義丸、哲学の朝永三十郎、倫理学の吉田静致、国語の松井簡治、日本史の峯岸米造等がある。在学中(明治41年の暮)、田中チカと結婚、明治38年卒業後は研究科に在学し、また同時に東京大学撰科にも籍をおくことができた。この頃からペスタロッチの教育思想に心を寄せ、「ペスタロッチの晩年」の小論稿を発表した。またこの頃 Ziegler, Th. の *Allgemeine Pädagogik*, 1901, に傾倒し、「人は人に対して神である」の語に強い感銘をうけているが、研究科時代にはヘルバルト学派のものほかに、Dewey, J. の「学校と社会」を興味深く読んでいる。またこの頃すでに和歌が日記にのこされている。和歌・訳詩の作品があることは、つねづね「不器用」と自らいわれている篠原博士の一面として注目すべきことであろう。

39年4月、福井師範学校附属小学校主事に任命され、就任した。“どんな新しいことをするか”と新主事に対して注目の眼を光らしている全県下の教員に対して、青年主事はただ『何もしない、教育的精神を生かしたい、ただそれだけである』『先ず内容を充せ、内容充つれば、形式自ら成る』という主体的立場に立って、ヘルバルト派の5段階教授法等の機械的な枠組にしがみつく一切の形式主義を打破しようとするのである。教場に花をおくことの可否とか、教訓の廃止とかをめぐる批判的主体的態度は、後年の大成を思わせる見識と洞察に充ちている。また訓練の基準を心理的発達の段階に即して設定する方案、主意的活動主義の教育論の提唱、教師本位の教育に対して児童の権利を力説する教育の主張、“快活なる児童”の一語において教育の理想を認めんとする主張、劣等生のための特殊学級の役置(明治41年)、“積まれた知識でなくて、自由にはたらく実力”をめざす教授法の高調、実態調査にもとづく国語教育法の提唱、新入児童の観

念界の調査、将来の生活の基底としての郷土生活から養い得た活力にみちた自己活動的・創造的人格の形成を目ざす郷土科の特設による教育の地方化・具体化・實際化の主張、勤労学校の教育観の紹介と主張等々、こうしてあげてくると、近代教育の基本の線はことごとくつかまれているのであって、戦後のいわゆる新教育もほとんどこの域をこえるものではないといわれよう。このころは、ナトルプ、ライ、ジェームス、モイマン、ケルシェンシュタイナー、ガッディヒ、リスマン、ミュンヒ、リンデ等から多くのものを吸収しているが、ことに“一切を児童から”決定せんとするモイマン的立場、“より少き教材”“より多き自己活動”“より多き徹底”の三原則に立つ自己活動主義、教育科学的方法を重視しつつも、“人生問題の解決”にあたり得る“生産的活動的勢力”をつちかう全人格的教育としてのリスマン的勤労学校の立場、これらのものはこの期の思想を理解するために重要な意味をもっているといわれるであろう。現場の教育実践に挺身しつつ、かくも広範囲にわたって泰西教育思想を吸収した初等教育の教師が明治以来何人あったであろうか。教育実践と教育理論との統一が青春のエネルギーに充ちた時期にかくも精力的に成就せられたことこそ、篠原教育学成立の基本的条件をなすものである。また福井在任時代に佐藤熊治郎・小川正行の両氏とともに師範学校教科書の作製にあたり、その際自分は論理学・心理学・教育史を担当している。この期の作としては明治45年の「勤労学校の主張」などは、特に注目に値するものである。44年には皇太子の行啓あり、夫妻ともに“拜謁の光榮”に浴し、一文を草している。この頃“もう少し勉強したい”心がおこり、京大の朝永博士に相談し、京大入学の決意をかため、仏語の勉強に“没頭した。”大正元年8月養父を失い、涙とともに野辺におくり、9月福井を離れ京大に入学したのであった。時に37才である。この福井7年の生活は篠原教育学に教育実践面の基礎体験を提供したのものとして極めて重大な意味をもっている。

#### 4 卒業・外遊・再婚

すでに40才近い身で3人の男の子をつれた老書生として、京大を志すにいたったのは、東京高師在学以来から敬慕していた朝永博士の人格にひかれたためであった。朝永博士に京大入学の志望をもらすと、『その時も、先生は“よかろう”とゆるされ、即座にカント撰集(二冊もの)をたまわり、Zur Erinnerung der Freundlichkeit と自署せられたのであった。……私が京都で哲学を専攻したのは、何も哲学的な方面に自信があったわけではなく、ただもう一度、先生の教えを乞いたいというひたむきの感情からである。』

京大では、朝永・西田・桑木・深田・狩野・小西・米田・藤井・藤代の諸教授の講義と指導とによって研究をすすめ、自由論を卒業論文として提出し、西田・朝永・藤井の3教授の審査をうけた。この論文はプラトン・カント的理想主義的立場のみならず、ジェームズ、フイエー、ブートルー、ベルグソン等の近世的立場をも涉獵した規模の広大なものであった。既述のごとく、運命と自由との問題は篠原少年がその人生の門出において直面した問題であったのであるが、『運命を左足とし、自由を右足として、ヨクヨク歩みはじめた』少年は今や40才にして自由論を書き、

### 篠原助市教授の生涯と業績：下程

大学の業を了え、大学院に入り、小西教授指導のもとに教育学を専攻するにいたったのである。（小西教授の「大学の自由」は在学中に聴講した講義の一つであった。）ことに注目すべきことは、在学中心読したウィンドルバンドの「哲学序曲」が『本来教育学は歴史的でなければならぬであろうとの、私の、いわば暗中模索的な考え方に一道の光を投げかけてくれた』ことであった。

在学中特筆すべき出来事の一つは、大正2年7月（大学2回生のとき）東京宝文館からの依頼で「教育辞典」の執筆にとりかかったことである。これは P. Monroe の *Cyclopedia of Education, 5 Vols.* を参考とし、毎日2時間宛時間をさき、前後8年間の日子を費し、独力で書き上げられた教育学辞典として特自の位置を占めている。他の著書と同じく、この著書も改訂を重ねている。大正11年初版、昭和10年1倍半の増訂版となり、更に昭和9年頃から関係した岩波教育学辞典の原稿を調べるかわら、引きつづき「教育辞典」の増訂に力をいたしたのが、昭和13年の主な仕事であったとするが、他の辞典が多数の共同執筆の寄木細工的な弱点をもっているのに対して、この教育辞典は重厚篤学の教育学者の単独執筆であるものとして、今日なお高い学的価値をもっている。

卒業論文提出直後、福井県に赴いた帰途、自分の故郷に縁の深い中江藤樹の書院を近江の小川村にたずねている。大学院に入学とともに、副手を命ぜられ、その傍ら神戸女学院・京都師範学校・奈良女高師・京都武術専門学校の講師をつとめ、また、高等女学校補習科の教育学教科書などを執筆にもあたりつつ、研究をすすめ、リンズを参照して、ギリシヤの教育理想から筆を起し、近くはナトルブやベルゲマンにいたるまでに及んだ「最近の教育理想」を大正6年「哲学研究」に発表している。ついでデューイの教育論を小西教授のすすめでまとめたが、この頃夫人は神経衰弱が昂じ、一時は京大病院に入院するのやむなきにいたったくらいであった。

大正8年4月から東京高等師範学校教授就任と決定し、東上する際は、特に西田・朝永・小西・藤井・野上・深田の諸先生に送別パーティをもっておくられた。東京では1週15時間の講義をうけもちながら、大正11年3月に外遊の途に上るまでに、ヘルバルト研究の論文、デューイ、ローリーとを参照した「教育即生活論」「社会的教育学の概念」等の諸論文を書き上げた。その成果はまとめられて、「批判的教育学の問題」と題し、「教育辞典」とともに大正11年の春宝文館から出版せられたのであった。（本書は昭和9年二編を追加した増補版が出ている。）その間に注目すべきことは、西晉一郎博士に先んずること1年にして、教育を『生れながらの自然性を理性的ならしめる作用』『自然の理性化』として定義したことである。ここから外遊前の教育学的結論は、次のごとくまとめられている、『自然の理性化により文化が歴史的に発展する限り、歴史的文化を介しての弁証的发展こそ、教育の根本的原則である。』

以上のような業績を公にして、外遊の途についた篠原教授は大正11年3月5日桑港につき、米国の各地をたずね、パーカー、ティチナー、ソーンダイク、パーカースト、ホームズ、スタンレー・ホール、ラッド末亡人、モンロー、キルパトリック等に会見し、見聞をひろめたが、7月夫人の病篤しという檜崎浅太郎氏の手紙に接し、急いで帰国の途についた。米国に対する印象は

#### 京都大学教育学部紀要Ⅳ

『あまり好きな国ではなかった』といわれている。船中の読書は、デューイの *Human Nature and Conduct* とハーンのものなどである。帰朝後約4ヶ月、加古川近くで病をやしなっていた夫人の病状も好転したので、12月10日再度外遊の途に上ったのであるが、この間に Keyser, G. J. の「数理哲学」をよみ、数学についての教育的関心を蘇らせたことは、注目すべきことの一つであろう。

欧州航路の船中では、ギッディングス、その他の社会学的関係のものがあるが、独乙語初歩の練習と記誦にもつとめた。12年1月22日巴里より伯林に入り、その後独逸の各地を歴遊し、シュブランガー、ナトルブ、イェーンシュ、フリッシュアイゼン＝ケーラー、リット、オイケン、ライン、フォルケルト等に会見し、種々の示唆を得たが、ことにフリッシュアイゼン＝ケーラーによってディルタイやシュライエルマッヘルへの関心を深められ、眼を批判教育学から歴史や生の哲学の方面に向けられたこと、更には敗戦にもかかわらず悠然または昂然たる独逸人の自主性に強い印象をうけたことは、特筆に値するであろう。

在独期間約半年にして、渡英すると直ぐロンドンで夫人急逝の報に接し、米国経由帰国すれば、関東大震災（9月1日）の猛火の余燼がこの傷心の帰朝者に横浜から品川まで徒歩を余儀なくせしめた。

一家の生計の問題もあって、帰朝後しばらくは東奔西走、各地の講習会に講師として出張したが、大正12年10月には、かねて外遊以前に内定していた東北大学法文学部教授の発令を見、教育学講座担当となり、当分は東京から通勤した。翌年9月近藤千穂と結婚した。千穂夫人の人柄は“今更に引きかえすべきすべもなし、行く手一つは神のまにまに”の一首に明らかにかがわれるが、昭和23年4月、65才にして逝いた時、枕頭の子息達が『一度も継母だとは思わなかった』と語ったところに、その真面目がうかがわれるであろう。

大正15年5月には師範学校専攻科の教科書として「教育綱要」（宝文館）を出版した。これは「哲学綱要」（昭和26年6月「哲学新講」としてその改訂版を発行）とともに姉妹篇を成すものであるが、あらゆる教育学的立場が簡潔に包括的にまとめられ、ここにも篠原教授の力量をうかがうことができる。

#### 5 大学教授、文部省調査部長

大正と昭和の交の頃、一家あげて仙台に移ったが、いつも『高等師範学校出身というだけで傍系扱いをうけたかのような感じ』をうけながら、『錦田・村岡・鈴木の諸氏以外の人々とはあまり深い交際もしないで、黙々として教育学の書籍にかじりついた』のであった。昭和4年に東京高師が文理大学に昇格するとともに母校への復帰転任の話がおこり、“他流試合とも称し得るような、かなり孤独な地位から脱出したい多少あせり気味”の気持に加えて“2、3の教授の、仙台の料亭における行動にあきたらぬもの”もあり、昭和5年4月に東京文理大学教授に転じたのであった。

## 篠原助市教授の生涯と業績：下程

仙台在職の間には、講義のほか、デューイの「民主主義と教育」、ルソーの「エミール」、ナトルプの「社会的教育学」を講読または演習に用い、また倫理学講座分担としてグリーンのものを用いているが、この間の最大の業績は昭和4年刊行の「理論的教育学」と「教育の本質と教育学」である。

「理論的教育学」は、処女作の一つ「批判的教育学の問題」公刊後、“教育古典の研究によって与えられた眼に導かれ、教育的論争の渦に巻きこまれないで、” “静かに傍観者の態度をとる”ことをもって貫いた7ヶ年の努力の結晶である。（本書は昭和24年に改訂版が共同出版株式会社から出ているが、その根本的立場には変りがない。）著者はその終始一貫した精神の故に“余りにも保守的である”という急進主義者の批評も甘受して、次のごとく書いている、『併し、私自身は却ってこのやかましい論争の間に立つ自分を守り得たことを喜ぶ。時代の潮流に従ってさまよう教育学は、まさしくは教育学と名づけらるべきでない。それはあくまで教育の本質から演繹せられ、教育の“真理性”の上に立たねばならぬ。所謂教育的論争なるものは、多くは教育を絶えざる不安に立たせ、無批判な読者を絶えざる混乱に誘うにすぎない。』かかる所信より生れた本書の構造は、ほぼ次の序文の叙述によってつかまれるであろう、『本書において、私は教育という現象の純粋な姿を把握しようとの努力から出発した。自然の理性化として、価値と存在との両界にまたがり、2者を結合し、むしろ自然から価値に高まり行く教育現象を如実に眺め、教育の対象性を確立することから出発した。次ぎに、教育現象の要素たる価値と存在との各々にわたって、教育的見地から、それぞれ一応の考察を試み、再び総合して、ここに根本意志の教養と精神的作業の原則という、私の教育学の根本概念——私が信ずる一切の教育活動の中核をつきとめ、最後にこれから演繹して、教育的価値実現の可能条件としての教育方法上の原理にまで論及した。』

まことに、篠原教育学の根本的立場は、次の言葉に明らかである、『教育の意味及び本質に対する理論的考察から出発しないで、教育学を単に一定の目的に達する基準の学と見る限り、その自立は永遠に望まれ得べくもない。“教育行動そのものの定理、”これが教育学徒として、我々が何よりも先ず第一に解決せねばならぬ緊急至上の問題である。』かく教育学の第一根本問題となるべき教育の本質の問題の究明を正面からとり上げたものが、学位論文「教育の本質と教育学」である。本書は教育科学派の叙述からはじめて、篠原教育学の中核をなす「根本意志」に究明の歩みをすすめるのであるが、教育学の自律性の問題に肉迫して、自立的教育学が“開いた体系”であることを主張し、教育学の方法に言及している。ここで大きく浮び上ってくるのは、理論的教育学と実際的教育学との関係である。向後の篠原教育学の課題は後者の究明にその焦点を結ぶのである。この論文は昭和2年4月から10月末まで毎日執筆され、京都大学教授会を通過したのは、昭和5年第一学期末であり、同年9月（54才）文学博士の学位が授けられたのであるが、篠原教授の学位についての考え方は次のごとくである、『なるべく閑静な生活に入り、経済的にもあまり配慮しないようにありたい。それには“学位”を得ておくのがよからう、学位なくとも、

## 京都大学教育学部紀要Ⅳ

世間は適当に評価してくれるなどと、うぬぼれてはならぬ云々。』

東京に転じて2年目の昭和6年には、豊島区に200坪の地所に総坪数65坪の新居を建て、更に3年後隣の宅地100坪の家屋敷を買いとり、建坪は新旧合計で100坪になった。(この家は昭和20年4月空襲で書斎のみを残して焼失した。)また昭和7年には相州吉浜に400坪の土地を得て別邸「太初庵」が出来、研究・避暑・避寒に用いられたのみならず、戦争末期にはここに疎開したのであった。

これまで、京都と東京と仙台との学芸生活と、故郷と福井県との教育実践生活とにより、理論と実践との両面に通ずる機会を与えられて来た篠原教授は、はからずも昭和9年1月から文部省教育調査部長に任命せられ、教育行政にもたずさわるに至ったのであった。教育の理論的研究と教育実践生活と教育行政の経験との3者をお互い兼ね合わせることは、教育学者として望ましい要素的条件を全面的に与えられたといわれよう。12年6月退職の日まで、たえず研究と実務との併行をはかり、「教育辞典」の増補、「教育学」「シュライエルマッヘル」の執筆、ジュンテレーの研究、更には京大の特殊講義担当等に力を致すとともに、教員養成制度の問題、普通教育課程と職業教育課程との関係、実業専門学校と大学との関係、女子の大学教育の問題等々の調査や協議に参加したのであったが、せめて平生文相の抱く義務教育年限延長案の実現を期したものの、次第に教育に対する軍部の圧迫ははげしくなり、安井英二の文相、伊東延吉次の官就任とともに、自発的に3年半の教育行政面の生活に終止符をうったのであった。この間に体験したことは、“文相の低調さ、”軍部の強引な干渉に仰合する視学官や学者の浅はかさであった。その間にとくに注目すべきことは終始『政争にまきこまれてはならないと自戒しつづけた』ことであつた。この間の生活から得られた教訓は、昭和15年森岡学長の後任問題に関する毅然たる態度決定として発動したといわれよう。学長後任者をきめる無記名投票で最高点となったとき、“即座に辞退し”，3教授が代表としてすすめられても、『文部省での三年半あまりの役人勤めで、私に教育行政の能力のないことは、百も承知している。……自分にはなお自分に適した仕事が残っているではないか、と本心はささやく。衣食の料はどのように乏しくなろうと、“富己れを識るより大なるはなし”ではないかと、断然三教授の勧めを拒絶した』のであった。こんなところにも、3年半の教育行政生活は意味をもっているのであるが、今や教育行政的实践生活を“断念”した篠原博士は研究生活にその全力を“集中”するに至ったのである。ここにも現実の“生活からの純粹”が高次の次元の“生活への純粹”として発動し、博士の大成期の水量を倍加せしめたといわれるであろう。

## 6 篠原教育学の体系的完成

昭和5年仙台より東京に帰つた当分は、前任地東北大学に講師として出講しているが、昭和8年には京都大学の教育学の講義を担当している。文理大学においては、演習・講読にヘルバルト、ペスタロッチ、ヘーニヒスヴァルト、ヴィルマン等を用いたが、今や研究の主な関心は實際的教

## 篠原助市教授の生涯と業績：下程

育学に向けられたのであった。この方面の第一の成果は昭和11年9月に成った「理科教授法」（東洋図書株式会社）ある。これは、『すべて真の歴史は現在の歴史である』という見地からして、『教授法における歴史の現在性、あるいは現在の教授法の歴史性』を明らかにすることをもって一貫した著作であるが、ここではすでに今日のいわゆる単元学習の問題が明確に取上げられている。ここには“一つの、または多くの自然法則を表現し、児童が強い興味を有する対象”または“生活上重要な意味を有し、物理的現象の一群を代表する対象”を意味するヘルバルト派のシュレル及びコンラートのいわゆる“物理的個体” *physikalische Individuen* の概念が引合い出されて、『もし我々が物理学の各分科の教授を、物理学それ自身の系統を乱さず、しかも児童の発達に順応しつつ、物理的個体に結合することを得たら、かかる排列こそ最も教育上の諸要求を満足し得るものと称すべきであろう』（同書68頁）と説かれている。

昭和12年6月文部省退職後、13年10月から、牛込の家政学院において教育学を講じたが、昭和16年4月、65才にして停年退職の日をむかえた。その後における主な仕事は著述であるが、後年の精力的な著述活動はまことに驚嘆すべきものである。

最初にとりあげるべきものは、昭和14年1月に「教育学」（岩波全書）である。16年前、京大時代に、教育は自然人を文化人・歴史人にするのと説いたウィンデルバントの説に深い示唆をうけ、また教育をもって“人間における歴史の生産”と考えるニコライ・ハルトマンに力づけられて、『個性の歴史化という大命題が深い根をおろすにいたった』その成果が実に「教育学」である。本書は「実際教育学」と銘をうつものの、「教育的指針の羅列に止まるいわゆる、処方教育学」をこえて「体系的な実際教育学」の立場に立つものであって、その基調はあくまで哲学的である。文理大教授に就任早々『哲学的でない教育学を講義しようとは絶対に思わない』と宣言したその学的態度は、この著述の全体を貫いている。他の教育学概論がほとんどば多くの立場を漫然と羅列しているのに止まるに対し、ペーテルゼンやクリークやザイフェルト等の影響をうけつつも、本書があくまでねばり強い哲学的思索で貫かれた体系を樹立していることは、本書が日本教育学史上独自の位置を要求する所以をなすものである。

さらに昭和14年には、「教育学」ととも岩波版「大教育家文庫」の一編として、「シュライエルマッヘル」が出ている。本書は『プラトンやカントを知らないで、大凡哲学について語り得ない如く、シュライエルマッヘルを通らないで、教育について云為するは、あまり大胆である』という立場に立って、この大教育学者の生涯と教育学説を包括的に記述したものである。本書に先んじて、前年の7月には、また「教育断想」（宝文館）が出ている。本書は謙虚にも題名を「教育断想」としていること、後程恩師朝永先生がその一著を「哲学史的小品」と名付けられたごとくであるが、その学的価値においては篠原博士の全著述中最も高きものの一つである。ヘルバルト、デューイ、クリーク、トゥムリルツ、ケルシェンシュタイナー、ディルタイ、フリシュアイゼン＝ケーラー、ジェンティール等の諸家の見解を検討しつつ、体育・習慣・問・労作教育・教授・自由・愛・教育学の学的性格等々の諸問題を論究するものであるが、著者がその序文におい



て次のごとく語っていることは注目し、『旧著「理論的教育学」において“根本意志の教養”を教育の第一原則にかかげた当初から“生活からの、及び生活への純粹”について説く今日にいたるまで、何等か一貫して存する底流を、読者は恐らく各論文の基調において読み取らるるであろう。人が自分の皮膚を脱ぎ棄て得ないごとく、私はいつまでもこの底流とともに浮沈するであろう。そしてこの底流の動きに沿うて、将来ますます自己を深め、教育諸問題の一層具体的な解決に、微力ながら努力したいと思念している。』

しからば「生活からの、生活への純粹」とは何をいうのであるか。ここには、「外延的拡大の諦念すなわち内包的集中の活動」というゲーテの根本的生活態度をおもわすものがある。「生活からの純粹」とは「個人の中なる利己的衝動を浄化」を意味する、ここには、社会からはなれ、自己吟味と自己批判によりて悔い改める“断念と浄化”が行われ、これによりて、人は“歴史的人格”として新しく生れ出るのである。この断念による新生、解脱としての転生によりて、高次の生に没入することが「生活からの純粹」である。それは「自己超越としての歴史的精神への新生」である。これに導く媒介として偉人の感化と宗教的歴史的行事とがあげられるが、自己中心的生活の断念・超越はやがて「生活への純粹」としての集中的献身的に“自己の本分に応じた生活”に没入する活動となり、ここに“神に召された”というほどの尊厳性をもつ(職業) calling, Beruf への没入が成り立つ。この方向をたすけるものとして職業陶冶の立場が出てくる。しかしかかる職業的集中としての“生活への純粹”は当然“片よったもの”である。ここに“片よったものの片よりながらの統一”“同質的なものの結合でなく、異質的なものの統一”が問題となる。かかる統一を共通の文化材によってうち立てるとき、「文化的統一」がなり立ち、かかる方向を教育的に可能にするのが一般的陶冶である。各人の個性に片よった職業陶冶は円の中心によってあらわされ、一般的陶冶は中心より円周に至る領域によってあらわされる。『併し、社会のまことの統一は、文化的統一よりも深い層に位する“同胞としての統一”に存し、“同胞”こそは一切の人間の統一の理念である。……ここに同胞とは自が他であり、他が自であり、他のうちに自を、自のうちに他を見出し、相互の献身的没入による自他合一の境地であり、かような統一はまことに神の国の地上における実現であるといってもよい。それは自らを敬うとひとしく、他を敬い、敬であって、同時に愛であって、しかも宗教的な心情に浸透せられ、ここにはじめて一切の“私”なる者は断念し尽くされ、人格と人格とのまことの社会は成立する。そしてかような“同胞”をめざしつつ動く教育の一面を古来われわれは訓育の名でよび来た。だが、ここにも、我々は訓育をば“品性への影響”という個々の人格への作用に限定しないで、“同胞”という社会的見地において見なおし、立て直し、宗教的な根源においてその尊厳性を保証しなければならぬ。』“片よったものの片よりながらの統一”を可能にするものは、文化的統一と社会的統一という“二つの層”であるが、その関係は次のごとくいわれている、『文化の獲得による文化的統一が社会統一としての同胞的統一の内容となり、逆に同胞としての統一が文化統一の基礎となり、相云に依存しつつ、離れながら(個々の活動において)合一する(全体的態度において)ところ

に、まことの社会的奉仕は成立する。いわゆる教授と訓育との関係如何のごときも、かかる依存関係において正しく理解せられねばならぬ』と説いて、著者は“同胞”の概念が抽象的一般的な“人道”でなく、具体的民族的な“同胞”を意味することを指摘している。かかる“民族的国家的統一”の立場はまた「教育学」を貫いている。それでありながら、ほとんどいわゆる超国家主義的色彩をもっていないところに、「教育学」の独自性と特色があるのであるといわれよう。かかる立場において、実践的教育学の基礎工作を一通り成就した博士の関心は、主として教授論と訓練論に向けられ、この2つの部門は西洋教育史の研究とともに向後の博士の研究の主要テーマを成すのであるが、戦時体制の強化とともにパスに乗りおくれまじとひしめき合う教育学者も多いなかに、『敗戦と早く見切りをつけた私は悠悠閑閑たりであった』という心境に住しつつ、渾身の力を傾けて戦時中に世に問うた労作は昭和17年11月発行の「教授原論」（岩波書店）である。本書は前著「教育学」が開拓した基盤に立脚し、サイフェルト、ヴィルマン、エッケルスドルフ、リーベルト、ヴィツヒマン等の諸家の見解を参照して、教授の根本的立場と方法について究明するものであるが、本書も改訂版が昭和23年6月に玉川学園大学出版部から出ている。新旧両版を貫く根本的立場は、次のごとくである、もともと教授は『教授するとともに、教育する“教育的教授”』である、その本質は、単なる受動でも、また全然自由なる発動でもなくて、両者を止揚した“受動的発動”であり、学習は“学習せしめる学習”としての補導である。同様に真の自主的態度は、“拘束における自由”であり、真の自己活動は“自発的受容”である。ここから、“作業学校から生活学校へ”という標語がかかげられる。作業中心の立場に立つところから、終戦後やかましく論じられた「教授内容の統合の問題」も詳細に論じられている。この点に関して、次の見解は注目に価いする、『（教授内容の統合）は未だ案上のいわば眠れる統合にすぎない、これを眠りからよびさまし、生きた力たらしめるものは、教師であり、“教授による統合”は一切の統合の予件である。すなわち、案上の統合が教授作用における統合、もっとなつきつめて、教師の人格的統合となって発動するとき、はじめて統一ある人格は育成せられる。従って人格的統合さえ完全であれば、案上の統合は多少不備であろうと、必しも深く憂うるに足りない云々。』

ところで旧版の方では、統合の原理について、次のごとく書かれている、『我国の教育は万邦無比の国体に淵源し、肇国以来、一貫不動の道に則って行われ、未だ曾ってかわるところがない。一貫の道とは、教育に関する勅語に宣示せられた皇国の道で、この道こそ我国一切の教育の根元であり、永遠の理念である。我国の教育は一切この道に統合せられ、この道は一切の教育を遍照する太陽である。一言に、我国の教育は凡てこの道に理念的に統合せられ、この道の実践以外に教育なるものは存しない。……前に理念的統合の中心を国民精神に求めた私は、今やなおその根元にさかのぼり、皇国の道を、統合の永遠の理念として仰ぎ得る。我国のごとく永遠で不動一貫の道を有しない諸外国においては、民族精神（国民精神）を最終の根元と認めざるを得ないに反し、……我々はなおその根元において万邦無比の国体の精華である皇国の道において、永世不易の教育理念を仰ぎ得ることは、無上の光栄であり、また限りなき誇りである。』しかるに、

改訂版においては“皇道は凡てを貫く筋金である”とする超国家主義の徹底的克服が説かれ、“真理と正義、自由と責任とを背骨とする自主的な態度”に生きる個人主義の立場が高調せられて、次のごとく「現代教育の最高理想」「教材選択の最高原理」が求められる、『しかし（かかる個人主義）を国家主義・社会主義を一切ふるいおとし、民族としての自信を棄て去った個人主義と早合点してはならぬ。さような個人主義は根をさらわれた浮草でしかない。我国には由来民主主義的なものの片鱗も存しないなどと、見くびってもならない。国家、社会の一員でない個人、民族の伝統に育たない個人なるものは、個人と称せらるべくもない空虚な抽象である。古い、歪められた国家主義、社会主義を否定し、高あがりの民族主義を否定しながらも、これをより高い立場に総合することによって、はじめて新しい個人主義は成るので、それこそ本来弁証的なるべき歴史の約束であり、生き伸び行くべき伝統を地盤としての跳躍こそ、歴史的決断なのである。即ち当面の問題は、長い歴史的伝統を背骨とし、歪められた血や肉を洗いおとし、これを民主主義的なものに改造するには、どうしたらよいかというにある。背骨を失った軟体動物ではなくて、日本人としての本来の背骨に新たな血や肉をつけた真に個性的な人格を形成し、日本人としての自信を失わず、民主的な血の生き生きと循環し、まちがったものはどこまでもはねとばす弾力性をもった完全な人格を育成するにある。これこそ現代教育の最高理想であり、同時に教材選択の最高原理である。』この点には、もとより日本の大きな歴史的断層の反映が見られるかのごとくであるが、後にのべるごとく、篠原博士は、新旧の「教授原論」の中間に位する「民主主義と教育の精神」（23年10月）において、明確に「我国独自の伝統」としての人間天皇を中心とした敬愛共同体を説くのであって、その点は一貫しているものがあり、戦時中八紘一宇の「国家教育学」を説き、終戦後は急進主義にはしる行き方とは異なるのである。

敗戦の兆いよいよ濃くなる間にも、研究と執筆はつづけられ、昭和17年11月から着手せられた「独逸教育思想史」は19年3月に上巻（原稿1781枚）同8月31日に下巻（原稿1083枚）が脱稿のはこびとなったが、終戦後昭和22年に創元社から発行された。本書は昭和25年に若干加筆せられ、「西洋教育思想史」と改題されて、同じく創元社から発行せられた。この著作は篠原博士の *life work* として推すに足る力作で、他に比類を見ざるものといわれる。多年原典と取組んだ学究の鬱然たる学識が我々に迫って来るのである。これほどの労作は日本教育学史上空前であったといわれよう。ここには篠原博士の教育史家としての面目が余すところなく露呈している。

昭和20年4月には東京の家が空襲で焼かれたが、同年6月6日数え年70年の誕生日を迎えて、『日和日をしなかったのを喜ぶ、知定と精進とである』と日記に記した。『知定、安分ノさがない学究の徒として、私自身はこの吉浜の閑居に、足るを知りつつ、分相応の仕事をするほかに生きようはない、風よ吹け、雨よ降れ、栄養失調の境までも辛抱し尽そう。そうして实际的教育学の一部門たるべき“訓練原論”を書き終えよう。』かかる心境から生れた「訓練原論」の脱稿による篠原教育学の完成を見ずして、昭和23年4月千穂夫人が65才で逝いたことは、老年の碩学の心を深く痛ましめるところであった。

## 7 晩年 Vollendung

終戦の混乱期において、憂国の至情から、最初に世に問うたものは、昭和22年10月出版の「民主主義と教育の精神」である。民主主義の根本的態度は、「真なるものに対する愛」を根拠として、各個人が個性をもったままに、謙虚寛容の態度をもって、自由に納得いくまで“語り合うこと”である。かかる民主主義は、我国においては、「我国独自の伝統」すなわち人間としての天皇を国民のすべての敬愛の中心とする“敬愛共同体”の場において成り立つ。「伝統の民主的再創造」を力説して、『民主主義の創造により、在来の伝統を強化する』立場に立つ篠原博士によれば、かかる敬愛共同体の実現こそは、無限なる愛の道そのものである。しかもかかる道を行くにあっても、「手近なものから」歩一歩進むことは「教育一貫の大原則」である。あくまで歴史的传统をふまえつつ、最後の根柢を宗教的なものに求めるところに、篠原博士の直訳的ならぬ民主主義教育の立場の特色があるといわれる。

更に滔々たる新教育の直訳的流行という状況を眼において書かれた今一つの書物は「新教育学概論」（昭和23年富士書店）がある。本書は小著ながら教育の意義・本質・目的から説きおこして、教授・訓練・道徳教育にも及ぶものとして、篠原教育学のハンド・ブックとも目すべきものである。つとに“統合”について論ずるところがあった篠原博士は、コア・カリキュラムの直訳的な浮薄な流行に対して、幾重にも批判的ならざるを得なかったのであった。『小なるものから大なるものへと漸進するか、始から大規模のものたらしめるかは、それが形式的に硬化するか、または精神的であり得るかのわかれ目である。特に小学校の如く、見識のまだ発達せず、責任感のまだ熟していない児童を対象とする場合には、慎重の上にも、慎重な考慮が払われねばならぬ。くれぐれも虎を画いて狗に類するの愚は演じたくないものである』という本書の最後の文章は、うつつもって新教育全体に対する博士の警世的文字というべきであろう。なお新教育全般について博士の見解は、本書の増訂版（昭和32年、理想社）にうかがうことができる。

更に実際の教育学の具体化としてペスタロッチー的精神をふまえて書かれたものに、昭和24年出版の「家庭教育の話」（宝文館）がある。本書の核心をなすものは、母子の関係を「自然即精神」としてつかみ、家庭において「人と人との神聖な接触」を見出すペスタロッチー的精神である。かかる精神よりして、一切の教育の原型としての家庭教育の問題を極めて精細に論究した後をうけて、「これさえ出来ればと渾身の努力を払った」結晶として生れたものがすなわち「訓練原論」である。本書は吉浜疎開（昭和19年4月）以前に起稿、レームケ、フェールスター、ケルンシュタイナー、デュルケーム、ペスタロッチ、シュライエルマッヘル等の諸家の所説を参照して書かれ、昭和25年9月宝文館から出版された。師範学校の卒業論文として「訓練論」を書いて出発した篠原博士の教育学の体系は、この「訓練原論」において体系的に完成したのであるが、本書は既述の「人による、人のため」ということを道徳生活の基本理念として、従来より一貫して抱懐する主意主義的立場を徹底して、意志を直接の対象とする訓練の問題をあらゆる角度

## 京都大学教育学部紀要Ⅳ

から考究し、しつけ、賞罰、遊戯と作業、道徳的知見、習慣、家庭と学校、自律と自治等の問題を綿密に原理的にまた具体的に解明せる点で、戦後の多くの道徳教育論中、第一級に位するものである。

かくのごとくして、昭和4年に「理論的教育学」が出て以来、20年間一日のごとく労作によって実際的教育学の完成を見た今、篠原博士は70才をこえた高齢をもものともせず、理論的教育学と実際的教育学との結合を可能にするものとしての教育哲学を樹立しようとするのである。すなわち、『教育の中心課題としての“自然の理性化”を取扱った「理論的教育学」と“個性の歴史化”をはじめのべた「教育学」(岩波全書)とを統合することによって』実際的教育学のしっかりした地盤を獲得し、同時にそれを実際的教育学の二部門である「教授原論」と「訓練原論」の土台とせんとするのである。この意味で、昭和26年出版の「教育哲学」(富士書店)こそは、篠原教育学の総決算である。この書の完成とともに博士は北陸旅行に出向くのであるが、このとき、既述のごとく、18年目に花をつけた木犀に托して“何事も耐久である”と語るのである。時に博士は74才である。

昭和27年4月から退職後11年目に玉川大学教授に就任し、30年3月まで、教育哲学の講義やヘルバルトの講読等をもったが、自宅で講義をすることが多かった。27年には急性腎臓病にかかり、辛くも一命をとりとめたが、その年の日記の末尾には、『運命に従順、静かにこれに耐えるにより、運命は拓り開ける。日日を感謝の生活とせよ。感謝こそは魂を洗い清める』とある。実に感謝は人生の完成に自づと湧き上る聖なる凱歌である。大小20種に及ぶ著述によりて、篠原教育学は日本教育史上はじめてともいうべき質量ともに他人の追隨を許さぬ卓越した体系として古典的完結を見せたのであるが、死の前年にはその生涯にわたっての生活と著作について思い出を詳しく書いた大著「教育生活五十年」(相模書房)が出版された。これは、誤植や記憶の誤りなどがあるにもかかわらず、篠原教育学研究上極めて重大な文献である。

著述活動において、完全になすべきことをば了了えた篠原博士は、戦争においてただ一人も子女を失うことなく、みな立派に成人せられたのをみとどけ、昭和32年8月2日吉浜(湯ヶ原)において82才の地上の生を終えたのであった。まさに *Vollendung* とは博士の生涯をいうものであろう。まことに晩年の窮極の心境は福井でのスピーチにひかれた次の詩句でつくされるであろう、『但見花開落、不言人是非』『閉門即是深山、読書随所浄土』

## 篠原助市博士年譜

明治9年6月6日	越智孫七次男として愛媛県に生れる
11年	篠原亀吉の養子となる(原稿. 愛媛県周桑郡田野村(現丹原町)大字田野上方六五七番地)
21年冬	私塾養正館入校 在塾2年あまりで退校農耕生活
26年10月	愛媛県尋常師範学校入学
31年3月	愛媛県尋常師範学校卒業

篠原助市教授の生涯と業績：下程

31年4月6日	周桑郡福岡高等小学校訓導
31年6月1日—7月12日	6週間現役
33年6月15(20日)	周桑郡壬生川尋常小学校訓導兼校長
34年4月10日	東京高等師範学校予科文科入学
36年7月	「英学志望の友に答うる書」(東京高等師範学校校友会誌)
37年12月20日	田中チカと結婚
38年3月31日	東京高等師範学校本科英語科卒業
38年4月	同校研究科(一年の部)
38年9月	東京帝国大学文科大学選科入学
39年3月31日	東京高師研究科修了
39年4月9日	福井県師範学校教諭 同附属小学校主事
39年6月	「先ず其の形を去れ」(福井県教育雑誌)
40年1月	「初等教育界の一年」(福井県教育雑誌)
40年2月	「六学年単級報告」文部省に提出(担任教育の作製したものに加筆)
40年5月	「校訓論」(福井県教育雑誌)
40年9月	「訓練方案」(福井県教育雑誌)
40年9月	「児童の権利」(福井県教育雑誌)
41年3月	「快活な児童」(福井県教育雑誌)
41年4月	「結果の方面から見た教授法の改良」(「小学校」)
明治41年—大正3年	宝文館の「教育の実際」に毎号海外の教育を紹介す
41年9月及び10月	「新入児童の観念界」(「小学校」)
41年10月	「郷土及び郷科」(「教育界」)
43年4月	「音律的体操について」(「教育の実際」)
44年1月	「俊才の教育」(「教育界」)
大正2年9月	京都帝国大学文科大学哲学科入学
5年7月13日	京都帝国大学文科大学哲学科卒業哲学専攻(卒業論文題目「自由」)
5年11月11日	京都帝国大学副手
6年秋	「最近の教育理想」(「哲学研究」)
6年12月	「デューイの教育論」(「哲学研究」)
7年4月—8年3月	奈良女子高等師範学校講師(教育学)
8年5月21日	同教授(論理学・哲学・教育学)
9年2—3月	「生活準備と連続発展」(「哲学研究」)
10年5月	「社会的教育学の概念」(「哲学研究」)
11年2月	文部省留学生(アメリカ其他)11年3月5日サンフランシスコ着
11年春	「批制的教育学の問題」(宝文館)
11年5月16日	「教育辞典」(宝文館)
11年8月20日	一旦帰朝(アメリカから)
11年12月10日	ヨーロッパに向い門司出港
12年9月上旬	帰朝(アメリカを経て)
12年10月11日	東北帝国大学法文学部教授(東京から隔週通勤)
13年9月27日	近藤千穂と再婚
14年秋	仙台市同心町一〇に転居
15年5月1日	師範学校専攻科教科書「教育学綱要」(宝文館)
同じ頃	(右上)「哲学綱要」(昭和16年絶版)

京都大学教育学部紀要 IV

昭和2—3年頃	「教育科学と教育学」（岩波社会経済体系の中）
4年6月10日	「理論的教育学」（教育研究会）
5年4月30日	東京文理科大学教授 5年度東北帝国大学法文学部講師
5年9月13日	文学博士
5年9月28日	「教育の本質と教育学」（教育研究会）
8年度	京都帝国大学文学部講師
9年1月16日	文部省督学官（教育制度調査部長 内閣調査官）兼東京文理大教授
9年度	京都帝国大学文学部講師
10年6月20日	「増訂教育辞典」（宝文館）
11年8月	「義務年限延長について」（文部時報）
11年9月25日	「理科教授原論」（東洋図書株式会社）
11年	諸学振興委員会常任委員（教育学）
12年3月31日	「教育と教育的精神」（「国民精神作興叢書」第4輯）
12年6月19日	東京文理科大学教授専任（文部省辞任）
13年3月	「シュライエルマッヘル」（「大教育家文庫」）（岩波書店）
13年7月25日	「教育断想」（昭和7年以降の論文集）（宝文館）
14年2月	「教育学」（「岩波全書」）
15年3月	諸学振興委員会常任委員辞任
16年3月	東京文理科大学停年退官
16年6月10日	東京文理科大学名誉教授
17年10月25日	「教授原論」（岩波書店）
19年4月6日	神奈川県吉浜に疎開
20年4月13日	東京の自宅空襲焼失
22年10月15日	「ドイツ教育思想史」上巻（創元社）（原稿は19年3月完成）
22年10月25日	「民主主義と教育の精神」（宝文館）
22年11月20日	「ドイツ教育思想哲学」下巻（創元社）（原稿は19年10月17日完成）
23年4月20日	妻千穂死去
23年7月25日	「新教育学概論」（富士書店）
24年1月14日	「家庭教育の話」（宝文館）
24年4月30日	「改訂理論的教育学」（共同出版株式会社）
25年9月1日	「訓練原論」（宝文館）
25年6月10日	「欧洲教育思想史」上（「ドイツ教育思想史」上の増訂版）（創元社）
25年6月15日	「 〃 」下（「 〃 」下の増訂版）（〃）
26年5月25日	「哲学新講」（「哲学綱要」の改訂版）（宝文館）
26年11月10日	「教育哲学」（富士書店）
27年4月	玉川大学教授
30年春	玉川大学辞任
31年12月1日	「教育生活五十年」（相模書房出版部）
32年4月15日	「新教育概論」新訂増補版（理想社）
32年8月2日	逝去（神奈川県足柄下郡湯ヶ原町吉浜 221）

（本年譜は本学部の篠原教授の御協力によって成ったものである。）